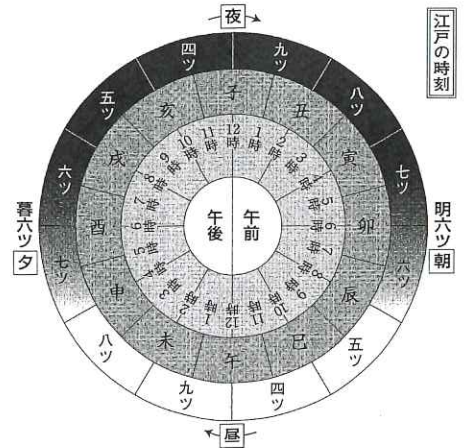
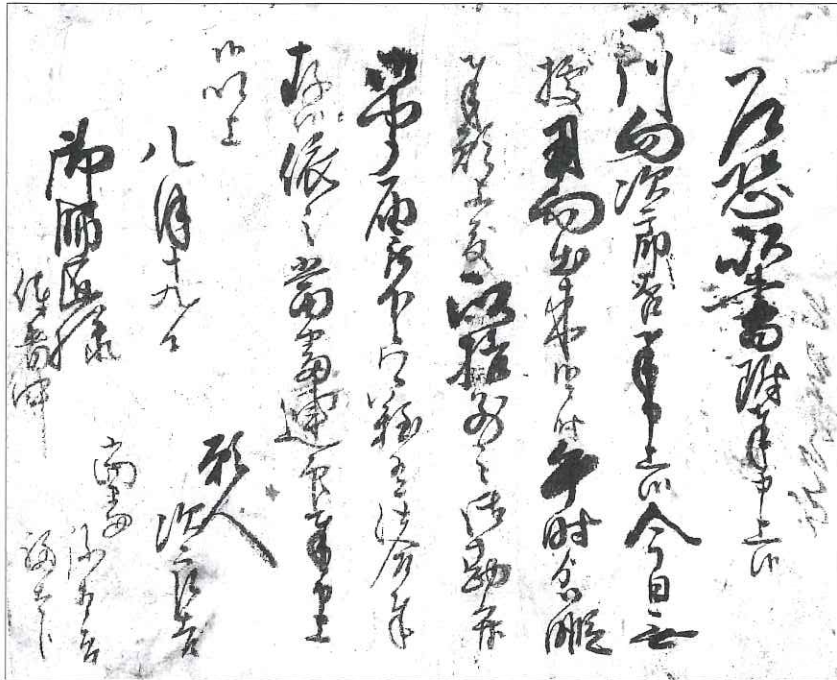


江戸の寺子屋—知育・徳育の諸相—

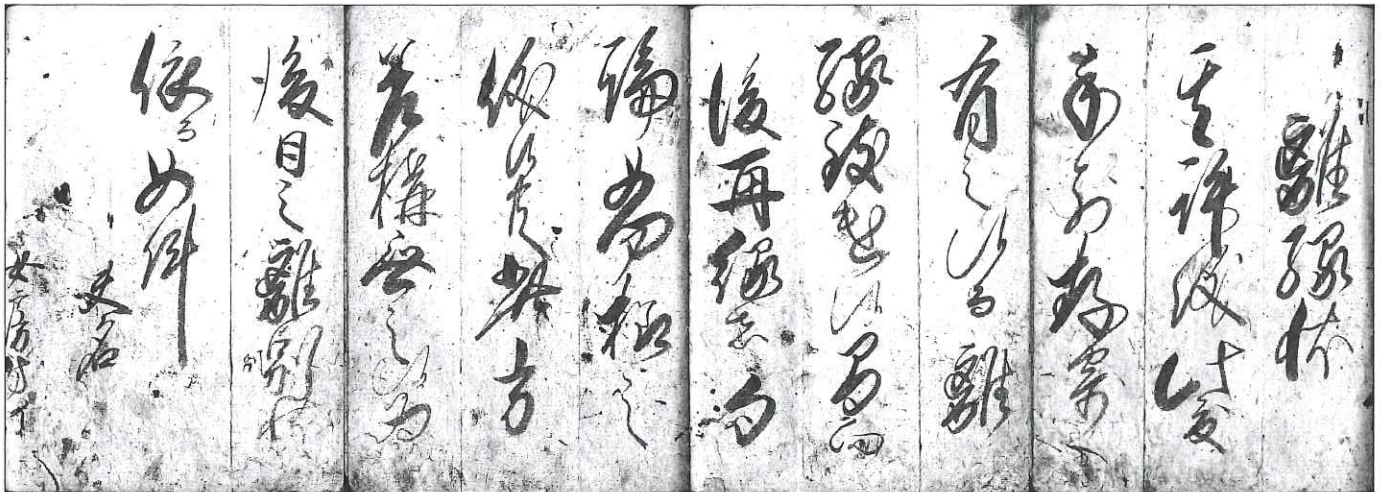
1：寺子屋における学びの風景

■ 赤沼家文書（慶応末年～明治初年） * 武蔵国比企郡羽尾村（埼玉県滑川町）
なめがわまち



乍恐以書附奉申上候
 一、川向次郎吉奉申上候。今日無
 抛用向出来候ニ付、午時より御暇
 奉願上度、以格別之御勘弁
 御聞届被下候はゞ、難有仕合奉
 存候。依之当番連印奉申上
 候。以上 願人 次郎吉
 八月十九日 当番 弥太吉
 御師匠様 福太郎
 侍者中

■ 天保3年書『御集手本』 * 越後国刈羽郡落合村（新潟県柏崎市高柳町）、寅藏ほか数名使用



■ 手習師匠の評価——3090人の証言

* 乙竹岩造の指揮により調査票約1万2000通を用意し、師範学校最上級生が行った全国規模の調査（大正4年6月～6年6月）

- 手習師匠の性格 ……………「優秀」____%、「普通」____%、「下劣」1%
- 寺子への愛情 ……………「寺子を慈愛した」____%、「そうでなかった」____%
- 師匠への尊敬(寺子) ……………「師匠を尊信している」____%、「そうではない」____%
- 師匠への尊敬(父兄) ……………「尊敬」____%、「冷淡」____%、「普通」0.2%
- 卒業後の師匠宅への訪問 ……………「訪問した」____%、「しなかった」____%
- 訪問時の師匠の指導 ……………「指導があった」____%、「なかった」____%

* 和田耕斎作、弘化3年刊『闇路指南車』
幼童に教訓の図



* 寿福軒真鏡 (江戸下谷・安楽寺住職) 編、
弘化3年刊『主従心得草』3編

童男・童女習い事を出精すべし。物習は
ざれば、成人の後、大いに悔やむ事あり。
物習うは出世の^{つる}臺、財宝の集まり所。



童男童女習い事を出精すべし
物習とふとせむの後の後よりよ
くやむ事あり物習ふは出世のつる
財宝のつるより所

■いろは板 * 安永8年(1779)刊『女訓姿見(女前訓鏡種)』

18世紀後半に京都で既に普及していた文字カード。
マリア・モンテッソーリ(Maria Montessori, 1870~1952)発明の
文字カードよりもはるかに早い。

◎寺子屋教育に関する参考文献

- 乙竹岩造『日本庶民教育史』全3巻(1970復刻、臨川書店)
- 石川謙『寺子屋一庶民教育機関』(1966、至文堂)
- 石川松太郎『藩校と寺子屋』(1989、教育社)
- 石川謙『日本庶民教育史』(1998復刻、玉川大学出版部)
- 利根啓三郎『寺子屋と庶民教育の実証的研究』(1981、雄山閣出版)
- 江森一郎『体罰の社会史』(1989、新曜社)
- 辻本雅史『「学び」の復権』(1999、角川書店)
- ルビンジャー『日本人のリテラシー』(2008、柏書房)
- 小泉吉永『寺子屋の文字教育』(『アジア遊学』No.109、2008、勉誠社)



■多彩な寺子屋

- 師匠の出張講義「出稽古」(東京)
- 季節限定の「草餅寺子屋」「草餅師匠」(茨城)
- 「通い弟子」、手習本の宅配から通信教育まで(東京)
- 夜習い「一文屋」「三文稽古」、成人のための夜学等(東京・大阪・茨城ほか)
- 辛抱強く熱心に教えた(無筆を免れた子ども、京橋区の樽屋の息子)
- 文房具を支給した慈善的な寺子屋(静岡)
- 風呂を設置し、公衆衛生に努めた寺子屋(愛知)

■生涯続いた師弟関係

- 師匠の食事を父兄が提供(佐渡の寺子屋)
- 師匠の炊事を寺子が支援(東京小石川区の寺子屋「雲晴堂」の師匠)
- 自宅が教室なので、非常に家庭的。師匠宅と子弟の家庭間で家族ぐるみで交流(おほめ、七夕)
- 生前のみならず死去後も続いた師弟関係
- 他の師匠よりも一段と尊敬されていた。領主に次いで尊敬され、名主・年寄以上の信望を持つ者も
- 近代小学校は不人気(「学校に行く」と「師匠のもとに行く」の違い)

■外国人が目を見張った日本の教育

【日本の子育て】

- 子供にムチを使わず、言葉で戒める…………… ルイス・フロイス(葡:1532-97 宣教師)
- 日本人は子育て上手。特に、忍耐・質素・礼儀を巧みに教える…………… ゴローニン(露:1776-1831 海軍士官)

【子どもへの溺愛】

- こんなに子供を可愛がり、いつもいっしょにいる国民を見たことがない…………… イサベラ・バード(英:1831-1904 紀行作家)
- 日本は子供の天国。子供が世界一大事にされる国…………… モース(米:1838-1925 動物学者)
- 日本人は子供に一生を捧げる。子供に対して寛大すぎる…………… フィッセル(蘭:1875-1930 通訳)

【日本人の子供】

- 立ち居振る舞いが完全で、のびのびしていて、愛嬌がある…………… ルイス・フロイス(葡:1532-97 宣教師)
- 善良、礼儀正しく、のびのびしている…………… チェンパレン(英:1850-1935 日本語学者)

■アンビリーバボー!! 西洋の学校教育

【修道院・教会付属学校の様子】 * モンテーニュ(仏:1533-92)・『随想録』(1580)

学校はさながら若人を幽閉する牢獄だ。いたづらをしないのに生徒たちを罰する。……授業の時に聞こえるのは、罰せられた生徒達が泣き叫ぶ声と、激昂した教師の怒号だけだ。教師は恐ろしい真っ赤な顔をして、その上、ムチを手にして生徒達に向かう。…血にまみれたムチの折れはしが飛び散る…



■寺子屋における体罰と「あやまり役」

- 食止^{じき}……昼食抜き。
- 鞭撻……竹製のムチで叩く。「尻べたに しっぺいの跡 筋立て」
- 掃除……教場や便所の掃除。
- 謹慎……師匠の側に正座させる。
- 捧満^{ほうまん}……天神机に座させたり、正座させて、線香と水の入った茶碗を持たせる。
- 留置……師匠が「帰れ」と言うまで帰宅できない。
- 破門……机や文庫を持たせて暇を出す。「師匠さま 机は重き 咎めなり」



* 図は安藤広重画、弘化4年刊『手習出精双六』(部分)

【留られ】 画工・板元の詫びにて元座へ返る * 挿絵は捧満^{ほうまん}と呼ばれるお仕置き
「良き事は 嫌うためしや 二日灸」一立斎

【破門】 精出して此の次御上がり
「初花の 案山子ともなれ 此の姿」困窮者

2: 人を育てた「あやまり役」

あやまり役(止め役・世話焼きどん)は、子供の非行や悪行に対して処罰が加えられた際に子供と一緒に謝罪する第三者(手習師匠の妻、近所の老人、寺子屋の上級生など)のことで、江戸時代の寺子屋では全国的に見られたが、あやまり役は、寺子屋以外でも広く行われた社会的慣行だった。例えば、次の事例は、あやまり役が寺子屋に限らず、社会全般に見られたことを物語る。

①親子茶呑吐

安永8年(1779)作『親子茶呑吐』(全159丁、合計約6万9000字の大部な庄屋心得書)は庄屋と父親の心得を全26章に綴る。そこには、作者・西村次郎兵衛(出石藩大庄屋)が苦勞の連続で体得した生活の知恵が凝縮されている。そのうち、後継者について述べた第4章「次男へ分地の事」に次の一節が見える。

一向に親の異見を用いぬ者は不憫と思わず勘当せよ。親類からたつての挨拶(詫び)があれば、1、2年親類の家へ預け置き、何なりと教諭してもらい、さらに直らなければ勘当せよ。それでも再び親類から引き留められたならば、やむを得ないので、坊主にさせ、小屋程度の部屋を用意し、生涯一人扶持の世話をしてやるが良い。……酒・色・博奕の三悪の一つでもある者には、先祖代々の土地を少しも与えてはならない。……惣領(嫡子)であっても不行跡なら勘当せよ。根性が直り、親類から詫びが入って勘当を解いても、次男の格で別家せよ。

親類の詫びで勘当が許され、反省に導くチャンスが何度かは与えられ、親類が見放さなければ、最低限の生活保障もあった。

②若者組の貰い下げ

若者組は、概ね15歳以上の青年が掟を言い渡された上で加入(加入が一人前の条件)する社会教育の場でしたが、静岡県の若者組には「貰い下げ」と称するあやまり役の事例が見られる。

○メンバーが掟を破った場合に、第三者が若者組の上役に「誰々が何か悪い事をしたそうですが、今晚のところ、わしの顔に免じて差し上げておくんなんし」と謝罪することで許された。*安良里村(現・西伊豆町)

○年2回の寄合で掟の違反者を審理し、「八分(絶交・除名)」と裁決すれば大勢で体罰を加えたが、主立った者が頃合いを見て「貰い下げ」に入り制裁を止めた。最も重い「永代八分(子々孫々まで絶交)」も仲介人の謝罪で許されることがあった。*小室村(現・伊東市)

③近代以降も続いた「あやまり役」 *「CANDANA」268号の拙稿を一部改編

大正8年(1919)刊行の嶋山春子著『我が子の教育』は、日本の母親が自らの育児経験を踏まえて著した育児書の嚆矢とも言うべき書で、刊行後20年足らずで30版を超すベストセラーとなり、昭和戦前期までの家庭教育に甚大な影響を与えた。以下は、子供が悪戯などをした場合の対処法を述べたくだりである。

父親には、万事を打ち明けて、心からお詫をする様に教へて遣らなければなりません。尚その上に、時としては母親も側から言葉を添へて、「今後は私これらも精精注意して、再び斯様な事をさせない様に致しますから、どうか今度だけは許して遣つて下さい」といふ様にしたならば、所謂雨降って地固まるで、此の事のあつたがために、却つて親子の間柄が一層親密になる様な結果となるであらうと思ひます。

同書後半で著者自身の20年間の育児経験を綴るが、父の留守中に2人の息子が著しい悪戯や過失を行った場合には、父の帰宅後に必ず詫びを言わせ、逆に善行があれば必ず父から誉めてもらったという。疎遠になりがちな父子関係で父親の積極的な関与を促した彼女は「敵父慈母」より「慈父敵母」を心掛け、夫婦協力型の家庭教育を目指したが、その際に「あやまり役」を有効活用した。

話は飛んで、2006年に「江戸の教育に学ぶ」という4回シリーズのNHK教育テレビに出演した時のことである。私の「あやまり役」の説明に続けて、案内役の柳家花緑氏がこう語っていた。

なるほどね、あやまり役。これには、心当たりがありますよ。落語界もいっしょで、弟子・師匠、師弟関係でね、弟子がしくじっちゃって破門になる、危険な局面を迎えた時に、師匠のおかみさんが「あやまり役」でいてくれると、すごく事が丸く治まって事なきを得たりするでしょ。つまり、「あやまり役」という人が、いるか、いないかによって、師弟関係が全然違ってくると思うんだよね。

古き良き伝統が残る世界には、今も「あやまり役」が息づいているらしい。

いずれにしても、今日消えつつある「あやまり役」は、江戸時代には広く見られた社会的慣行であり、近代以降も命脈を保ってきたが、「自己責任」論が風靡する現代日本で瀕死の状況を迎えている。「自己責任」に「あやまり役」は御呼びではない。

だが、和田秀樹著『この国の冷たさの正体——億総「自己責任」時代を生き抜く』が、自己責任の終着点や社会病理に警鐘を鳴らすように、自己責任の行き着く先には、深刻な「格差社会」「イジメ社会」「無縁社会」が待っている。「あやまり役」は、言わば「自己責任」の対極に位置する考え方であり、現代社会が喪失しつつある日本の教育文化の象徴である。第三者の積極的関与で家庭や地域のトラブルを円満に解決した江戸時代。「あやまり役」は、言わば「ピンチ」の状況を教育・更生の「チャンス」に変える庶民の知恵であった。「世話焼き」や「お節介」が絶滅する前に、自己責任社会を脱却し、人づくり社会への転換を図る必要があるだろう。

3：沢田泉山の往来物

■2人の手習師匠——猪瀬尚賢と沢田泉山

【猪瀬尚賢——無筆から著名な手習師匠に】

写真右の「女婚礼国尽」を書いた猪瀬尚賢(晴雲堂)は、もともと田舎育ちで、奉公に出た時は文字が全く読めなかった。江戸に出て商家の下男をした時に、番頭から「いろは」の手本をもらい、それを練習して次第に上達、ついに寺子屋師匠となった。もともと器用で、特に、古人の筆跡を模写することが上手なため、石刷りの版下書きを副業とした。明治9年(1876)調査で児童数250人、明治14年廃業。

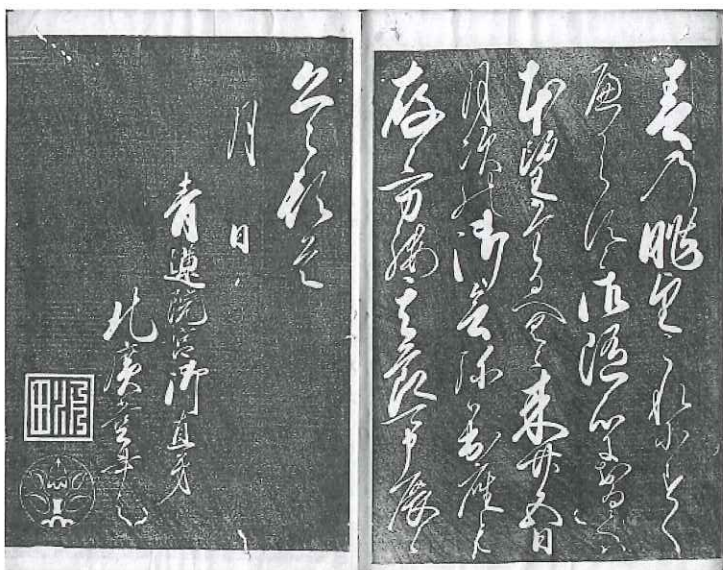
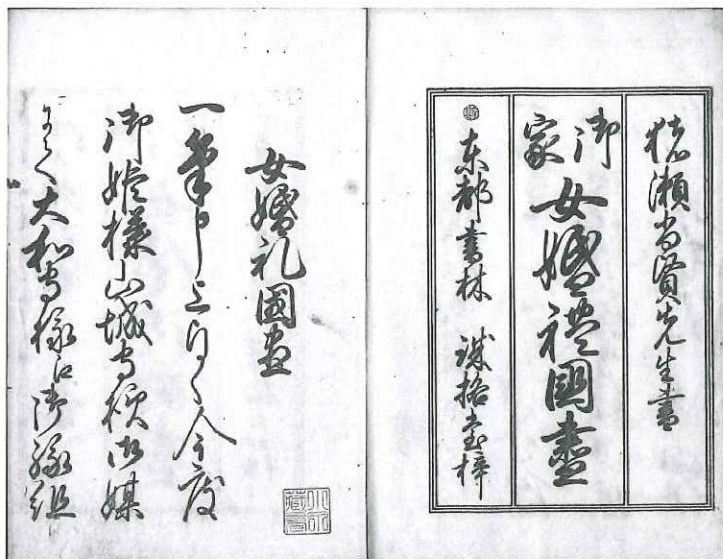
尚賢筆の出版物は多く、天保15年「玉のはやし」、嘉永2年「女婚礼国尽」、万延元年「要用往来」、同年「尊円親王真跡」、万延2年「幼童往来」、元治元年「女今川」、慶応元年「謹身往来」、明治4年「都路往来」等がある。

【沢田泉山——門弟は常時200人】

沢田泉山は、文政6年(1823)に北入曾村(現・狭山市)の本橋家次男として生まれ、明治43年(1910)に没した教育者である。24歳で入間郡北野村の沢田家を継ぎ、医者を目指して農業のかたわら医学を学んだが、近隣からの手習い指南の要望が強く医師を断念、安政2年(1855)に寺子屋兼私塾「北広堂」を開いた。この北広堂は埼玉県下随一の規模を誇り、校舎も当時珍しい2階建てだった。寺子は常時200人で、安政2年～明治5年の18年間に709人が入門している。4人に1人が女子で、門弟は1576人を数えた。また、通学圏は現在の埼玉県南部から東京都北部にまたがる61カ村に及んだ。学制以後、明治6年8月に「狭山学校」という小学校を設立し、地域の教育に生涯を捧げた。

泉山は算術の教具も開発するなど、教育指導法にも色々な工夫をし、各地の寺子屋師匠がしばしば授業参観に訪れたという。また、写真の慶応2年『隅田川往来』など10点の私家版往来物が確認されている。地方の手習師匠がこれほどの多くの出版を手掛けていた事実も特筆に値する。

* 正体不明の往来物の板木(左右反転)と北広堂全景図



【刊本*泉山の私家版往来物】 *和算書は除外。◎は沢田家蔵、●は小泉蔵

分類	書名	印刷	板種(所蔵)	備考
語彙科	1 当用并名頭	陽刻	●刊年不明(小泉)	当用(数字・単位他)・十干十二支・名頭
消息科	2 風雅帖	陰刻	●刊年不明(小泉)	
〃	3 [書名不明]	陽刻	◎刊年不明(沢田家)	本文の板木1枚のみで書名は未詳
地理科	4 国尽并郡附	陽刻	●刊年不明(小泉)	大日本国尽・異国名・武蔵之郡附
〃	5 江戸往来[自遣往来]	陰刻	●慶応3年(小泉)	
〃	6 隅田川往来	陰刻	●慶応2年(小泉)	
〃	7 近郷村名*板本	陽刻	●慶応1年(東大・埼玉県歴史)	方角毎に村名・字名等を列記
〃	8 近郷村名*一枚刷	陽刻	●刊年不明(小泉)	方角毎に村名・字名等を列記
産業科	9 商売往来并官名	陽刻	●元治1年(小泉) ●◎刊年不明(小泉1・沢田家3) ●明治初年(小泉*泉山署名を削除)	
〃	10 世界商売往来	陰刻	◎明治初年(沢田家)	泉山の署名はないが、泉山書か

【写本*泉山自作の往来物】

地理科	11 北野往来*写本	-	◎江戸後期書(沢田家)	「近郷村名」の発展形
-----	------------	---	-------------	------------

【沢田家所蔵の芝泉堂(坂川暘谷)版本】

古往来	12 ×庭訓往来	陽刻	●文政11年	
消息科	13 ◎増字消息往来	陽刻	●文政6年 ●天保5年 ●天保14年 ●嘉永1年 ●安政6年	
〃	14 ◎集芳帖	陽刻	●文政9年	
〃	15 ◎風雅帖	陰刻	●天保3年	
〃	16 ◎新春帖 書札文集	陽刻	●弘化4年	
〃	17 ×御家書札 仮名文詩歌	陽刻	●文政5年	
地理科	18 ◎江戸往来并八景詩歌	陽刻	●天保15年	
〃	19 ◎隅田川往来并八景詩歌	陽刻	●嘉永1年	
地理科?	20 ×菴田帖	?	×天保11年*地理科往来「菴田詣」と同文か	
産業科	21 ◎商売往来并官名	陽刻	●文政8年	
社会科	22 ×坂川色紙鏡	陽刻	●刊年不明	
〃	23 ×倭漢朗詠集	陽刻	×天保13年	
〃	24 ×瀟湘八景	?	×文政9年	
〃	25 ×和歌序手本	?	×刊年不明	
女子用	26 ×四季のちらし書	陽刻	●文政13年	
〃	27 ◎女今川并十二月和歌	陽刻	●天保8年	
〃	28 ◎教訓女大学	陽刻	●弘化4年	
〃	29 ×百躰百人一首	陽刻	●嘉永1年	

*『国書人名辞典』(岩波書店)

坂川暘谷 さかがわようこく 書家

(生没)安永7年(1778)生、嘉永2年(1849)6月14日没。72歳。墓、江戸本所本法寺。(名号)名、貴文。字、平学。号、暘谷・芝泉堂。法号、文光院教道日学。(経歴)伊勢の人。江戸に出て芝浜松町に住す。書を好んで粟田流の門派溝口流に入門、暘谷・松野雲谷に教を乞うた。その書道私塾に学んだ者は三千余人と伝える。

(著作)▽芝泉堂書話 (参考)広益諸家人名録(天保13) 三重先見伝 東京掃苔録



